様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６７２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３５７５

研究課題名（和文）社会科学習におけるつまずき研究の国際比較研究

研究課題名（英文）Research on students' mistake in the social learing from the international perspectve

研究代表者
池野　範男（IKENO, NORIO）

日本体育大学・児童スポーツ教育学部・教授

研究者番号：１０１５１３０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の特質は２つあった。第一はだれしも体験するつまずきを掘り起こし、それを集積することである。第二は学習が継続させることを保証することである。つまり、持続的な学習にすることによって、学習がより高いレベルへ発展させて、その学習を継続的で、向上的なものへ転化させることができることである。
　研究成果としては、通常学級の社会学習の多面的な場面でのつまずき収集とともに、世界の教室の観察によって、学力が低い子どもたち、学習速度が遅い子どもたち、また障害を持つ子どもたちに社会科授業、あるいはその学習において、つまずきを克服する方途を見出し、その支援を作り出し、より高い学習を保証する社会科授業を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、(1)教育研究の具体的な対象を学習者の学習行動にすること、(2)学習者の行動結果によって、その結果を判断すること、(3)学習効果によって、学習の深化度が推定でき、学習者の学習度合いを決定し評価でき、さらにそれを改善する方策を見つけることができることである。
　これらは社会的意義として、授業の改善から学習改善へと教育PDCAを転換させるものである。さらに、学力が低い子どもたち、学習速度が遅い子どもたち、また、障害を持つ子どもたちにつまずきを克服する方途を見出し、より高い学習を保証し、日本はもとより世界の学習を高いレベルに上げ、教育の在り方を変えるものである。

研究成果の概要（英文）：　This research has two characteristics. The first digs up the mistake that everybody experiences and is to accumulate it. The second is to guarantee that learning lets students continue. In other words learning develops it to a higher level by making sustained learning and is continuous by the learning and is to be able to let students convert it to an improvement-like thing.
　Through the lesson observation in the world and Japan this research has collected the mistake of learning in a multifaceted scene of the learning of students in social classes, developed social studies classes to guarantee higher learning.

研究分野：教科教育学

キーワード：社会科学習　つまずき　学習困難　質の向上

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

教育とその研究は教授から学習へとその焦点を移行させている。社会科もその渦中にある。国外では、Keith Sawyer(ed.), *The Cambridge Handbook of The Learning Sciences*, Cambridge University Press, 2006, 2014 が代表的である。その第一版の選択訳版（『学習科学ハンドブック』培風館、2009）が出され、わが国の心理学・教育学界に大きな影響を与えている。

とりわけ、学習指導要領の改訂において、アクティヴ・ラーニングが導入され、各教科の学習もその準備を急いでいる。しかし、各教科の学習そのものの研究が充分ではない。特に社会科の学習研究は世界的にも国内的にも遅れている。

本研究は①国内外の社会科学習研究のうち、つまずき研究に焦点化し、先端的研究をしている研究者とその研究の概要を調査しその成果を集約する。また②学校の社会科の授業と子どもたちの学習指導に活用できる知見を収集する。さらに③これらの知見を社会科教師が実際の授業で役たつものにするとともに、このほか知見を授業場面から収集するために研究方法を調査する。

本研究は社会科のつまずき研究を学習困難として始めた（池野 2014、2015）。その成果は、(1)容易性、(2)決断性、(3)行為随伴性、(4)独立性という学習の条件を発見し、それを特別支援学校用「社会」教科書で検討し始めた。社会科の学習困難の研究を進めた結果、文章読解と読解内容の両面の困難が、学習者の“つまずき”として授業場面で生じており、その研究が不可欠であると理解した。

２．研究の目的

到達目標：外国におけるつまずき研究の成果と課題を調査しそれらを集約し、わが国の社会科つまずき研究の仮説にする。

- 学習を成功からではなく失敗から判断することにより、学習をプラス成果ではなく、エラーの克服過程とみなす。
- 学習をある場面からある場面への過程と想定し、より高いレベルへの「上る」ことと図式的に構成する。
- 誰しもが「上る」ことができないところに、つまずきが生じ、それを教育場面で克服（＝「上る」）している。
- 誰もが「上る」ことを目指すことこそが、教育の使命（万人のための教育）である。

３．研究の方法

本研究の方法論は、そのデータ集積という点で、極めてオーソドックスな帰納的収集法である。しかし、そのデータは、プラス効果性を持ったものではなく、マイナス不効果性をもったものである。それゆえ、マイナスをプラスへ変更する手立ての発見こそ、教育の準備である。それもすべての人に対応できること、目指すものは、万人のための教育であり、すべての人に開かれた研究である。

そのために、外国の同様な研究やその成果との比較により、本研究の仮説（群）を導き出し、社会科学習のつまずきに関する新しい研究の出発点を作り出すことを具体的な目標である。とくに、つまずきの第一は学習者の子どものそれであるが、往々にして、教師や授業におけるそれである場合もある。

平成 28 年度の研究としては主に、先行研究を分析した。それは、池野を代表とする、学習困難に関する一連の研究「学習困難の研究（１）～（５）」（広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター編『特別支援教育実践センター研究紀要』第 12、13、

14 号、2014-17 年）の成果を中心に整理した。そのまとめとして、学問との連関と生活との連関の相乗的関連（仮説①）を摘出し，特別支援教育としての教科教育、社会科教育における学習困難にもこのまとめを適用可能であろうことを仮説として提起した。

平成 29～30 年度の研究としては、その研究方法論では、データ集積という点で、極めてオーソドックスな帰納的収集法を用いた。そのデータは、プラス効果性を持ったものではなく、マイナス不効果性をもったものである。それゆえ、マイナスをプラスへ変更する手立ての発見こそ、教育の準備である。それもすべての人に対応できること、目指すものは、万人のための教育であり、すべての人に開かれた研究である。

４．研究成果

平成 28 年度には、先行研究ともに、本研究の目的である、国際比較研究にも着手した。子どもたちの学習のつまずき以前として、中国の研究者（魏思遙「中国における授業設計改善方略研究－中学校地理の場合－」広島大学学習システム促進研究センター編『学習システム研究』第 5 号、2017 年 3 月、pp.69-79）の支援を得て、中国を事例とした教師の授業設計上のつまずきを解明する研究を参照することができた。その成果は、教師が教育困難を克服するには、２つのこと、つまり、目標実現のために目標―内容―方法の連関を図ること（仮説②）、学習者の興味関心を配慮すること（仮説③）である。

平成 28 年度の成果は、先行研究分析と中国における教師の教育困難研究から引き出した仮説①～③、つまり、学問との連関と生活との連関の相乗的関連（仮説①）、目標実現のために目標―内容―方法の連関を図ること（仮説②）、学習者の興味関心を配慮すること（仮説③）であった。

平成 29～30 年度の成果は、通常学級の社会学習の多面的な場面でのつまずき収集とともに、世界の教室の観察によって、学力が低い子どもたち、学習速度が遅い子どもたち、また障害を持つ子どもたちに社会科授業、あるいはその学習において、つまずきを克服する方途を見出し、その支援を作り出し、より高い学習を保証する小学校・中学校の社会科授業とその研究を進めた（「教科の構造に基づいた小学校社会科授業研究」「討議活動に着目にした中学校社会科地理授業研究」）。

本研究の特質は２つあった。

第一はだれしも体験するつまずきを掘り起こし、それを集積することである。つまずきの集積は、どの場面でどのように「上る」ことができないかを発見することであり、その結果、教師に支援の手立てを多様に提供することである。

第二は学習が継続させることを保証することである。つまり、持続的な学習にすることによって、学習がより高いレベルへ発展させて、その学習を継続的で、向上的なものへ転化させることができることである。

この 2 つの特質は、学習困難、つまずきの研究には、必須であり、不可欠である。それは、仮説①～③、つまり、学問との連関と生活との連関の相乗的関連（仮説①）、目標実現のために目標―内容―方法の連関を図ること（仮説②）、学習者の興味関心を配慮すること（仮説③）によって、言いうることを確認した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　８　件）

1 池野範男, 石原光, 高錦婷, 福元正和, 山口安司, 城戸ナツミ, 近藤秀樹, 尾藤郁哉,兒玉泰輔,茂松郁弥,山本稜,吉川友則,鈩悠介,神野幸隆,川口広美（2018）「討議活動に着目した中学校社会科地理授業研究」日本体育大学大学院『教育学研究科紀要』、第 1 巻第 1･2 合併号、pp.95-111

2 川口広美、城戸ナツミ、近藤秀樹、尾藤郁哉、高錦婷、福元正和、山口安司、兒玉泰輔、茂松郁弥、山本稜、吉川友則、神野幸隆、鈩悠介、池野範男(2018)「教科の構造に基づいた小学校社会科授業研究－知識の構造図と概念的枠組みを用いて－」『学校教育実践学研究』第 24 巻、pp83-92

3 池野範男(2017)「シカゴ大学実験学校の教育とその評価」『学習システム研究』第 5 号、pp.141－145

4 池野範男(2017)「教師のための「真正な学び」の研究：第三年次の研究－教材研究のための研究論文の読解とその「真正な実践」への活用－」『学習システム研究』第 6 号、pp.1-12

5 池野範男（2017）「研究者の学びの真正性の活用－共同研究（第一年次～第三年次）の総括－研究者の学びの真正性の活用－共同研究（第一年次～第三年次）の総括－」『学習システム研究』第 6 号、pp.79-84

6 Ikeno, Norio(2017), Elementary Social Studies Lesson Study in Japan: Case Study of a 6th Grade Politics Unit, *The Journal of Social Studies Education*、 Vol.6、 pp.63-74

〔学会発表〕（計　2　件）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。